資料渉猟余話

その125

南海さんって誰？ 中

嶋　不濁

次に「南海さん」の名前を見たのは、今村善興さんが残してくれた座光寺葵窯の資料「葵窯由来と経緯」である。未定稿なので、記述に濃淡のある何種類かのバージョンがある。善興さんの父・善香の「座光寺葵窯」の事業を記述したその未定稿の中に、昭和2年頃から昭和6年頃まで、平岡から陶芸家西澤南海氏を招いて製陶業（楽焼）を始めたことが記されている。先の新聞記事は「和田南海」、こちらは「西沢南海」になっている。はじめは別人で、南海さんが二人いると思っていたが、調べていくと同一人物のように思われる。というのも、尾林の水野英男さんが「週刊いいだ」に連載したコラム「伊那谷の陶工達」（1989・2・2）に、昭和5年頃として、西沢南海（細工師）、達磨や仙人の置物をつくるという記述がある。

座光寺　今村家蔵

また水野さんは、後に同じコラム「西澤南海」（1993・2・18）に「西澤南海は、岐阜県郡上八幡の生まれと聞く。昭和になってからこの伊那谷を訪れてきたと思われ、尾林・天龍峡・平岡・座光寺あたりを請われるままに遍歴して、細工物を多く残していった」「筆者が小学生（昭和14年）のころ、いつも和服姿の南海さんが、尾林のわが家に滞在して、こま犬、トラ等の作り方を教えてくれたものであった」「南海は卓越した腕を持っていたと同時に、この楽焼技法、釉薬の調合法、楽焼窯の作り方等々を伊那谷にもたらしたことは事実である」といった記述がある。

今村・水野両氏とも「西澤南海」としての記述であるが、出自や作品、放浪癖、奇人ぶりなどどうも先の「和田南海」同一人と思われる。「南海さん」、どこかで「和田」から「西澤」に改姓したのだろうか。先妻の失踪（後述する死亡）と関係があるのだろうか。とりあえず、上記の資料をもとに、その軌跡を辿ってみると、以下のように推定できる。

平岡　花田家

大正3年前後、郡上八幡から妻子とも5人で現在の天龍村平岡に来た（和田）南海が、その後、妻に去られ、子どもを2人を奉公に出し、自身は井出呑佛の紹介で尾林に行き、さらにその後、尾林から運んだ土を使い八幡町毛賀沢橋付近で焼物を焼いていたが、新聞に紹介された大正10年6月には千代村米川に居住していた。

その後昭和2年から6年頃には、座光寺葵窯築窯にあたり今村善香（古瀬）に招かれて座光寺に居住。その後、再び、尾林に戻った。ここでは「西澤南海」と記されている。

平岡　個人蔵

さらに奉公に出された二人の姉妹の側から鎌倉貞男氏が調査したところによれば、位牌に書かれた南海の本名は應木、妻はハルエ。ハルエは大正8年1月15日に没したことになっている。このハルエも先妻没後結婚した後妻であるのか、判然としない。新聞記事では「妻子とも五人」となっており、実際は大正6年に生まれ、後に橋本家に養子にもらわれた生まれたばかりの男の子もいたはずで妻子とも「6人」であったはずであるが、末子はどうやら数に入っていない。

が天龍村にやってきた妻、また3人の子を置き去りにして姿を消したとある妻であるのか、それと